

E 国 語 問 題

注 意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっています。HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は16ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は一〜三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しきれずにきれいに取り除いてください。

マーク例

①	1	2	3	4	5
0	0	●	0	0	0

(3と解答する場合)

一 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

だいたい僕は世の中で素樸そぼくというものがいちばんいいものだと思っている。こいつはいちばん美しくていちばん立派だ。こいつは僕を感動させる。こいつさえ捕まえれば——と、そう僕は年中考えている。

ところで、僕は今ここでその素樸(1)についてお喋りしようというのだが、考えてみるとれ臭くないわけではない。なぜと云って、素樸はそれについて語ることでできないものだから。それについて語ることは素樸でないだろうから。それをアえてしようとするのだから。第一、素樸が好きだとか何だとかいつてみても、それは理窟はいろいろとつけられようけれど、個人の好みや、生理的關係にもよるのだろうし、たとえそれを僕が芸術上の信条としているとしても、結局それは僕のひとり合点のことで、ひとり合点のことなら他人に押しつけないがいのだから。

何でこんなことを一々断わるかという、人の言うことを次ぎから次ぎへと勘違いして歩く人があるからだ。

僕は、これもひとり合点なのだが、大切なことなら誤解されてもかまわないと思つている。大切なことは誰にでも理解されるというわけに行かないもので、それでもその大切なことはそれをまともに聞く耳をいつでも持つている。第一、誤解されない、(1) 振ふじ曲まげられない、あくどく喰くつてかかられないような大切なことなどはいくらもありはしないのだ。ただそれほど大切でないことは誤解されることを用心しなければならぬ。もしそういう誤解が生じてそれを解かなければならぬとしたら、その仕事はなにしろ馬鹿々々しいに遠くないから。それほどいいその素樸(1)というものはそれならどんなものか。それが実は、素樸などというものを好きになつたお蔭で僕に説明ができないのだ。僕は僕の思いついた話や譬たとえ話をして、僕が考えている素樸に見当をつけてもらうことにする。

僕は(注1)フアーブルや(注2)ポアンカレーを素人考えて大そう好んでいるのだが、それは彼らの仕事の中身がつまつてい
るからだ。僕は素人考えて好いでいるので、科学のことは何も知らない。僕の眼に映つたようなものは彼らの科

学者としての仕事のほんの些細な一部に過ぎないだろう。だがそれならば、全体の仕事のほんの一部が、しかも科学者のことをまるで知らない一人の素人をそれほど感動させるとすれば、それは彼らの仕事の中身が全くひどくつまっているからだということになりはしなからうか。例えば『昆虫記』の中で著者は綿々として話しかける。彼の中には天国ほども豊富な材料がある。天体の運行ほども正確な実験や観察の結果がある。そして彼自身には、それを語ろうとする大きな熱意だけがあつて他意はない。彼は彼の話せるだけを話す。そしてそれつきりだ。彼は彼に対する愛憎を自然のように人まかせにしている。彼は行くところまで行き——その途中彼はただ行くことだけをする——そしてそこで倒れる。その仕事の仕振りは、いわばそのまま古典的であるほどにも水々しく、人をびつくりさせるほどにも素直である。

ところが僕はいつかポアンカレの『科学者と詩人』を読んだ。そしてそんな好きなポアンカレがちつともおもしろくなかつた。その本は何でも、亡くなったアカデミーの会員たちについて著者がいろいろな会合の席でした演説や雑誌に書いたものを集めて出来ていた。それらは、そのブッコした人たちの残した業績がどんなに大きかつたか、それらの人たちが亡くなつたいま我々はどんな大きな損失を感じなければならぬかを主として説いていた。それらのいわば非常に優れた哀悼の言葉は、ポアンカレの場合ある程度まで止むをえなかつたのであろうが、亡くなった人々を褒めることに主眼をおいていた。そして何よりも先に当のポアンカレは、アカデミーの最高の椅子に坐っている人であり、老人であり、そして彼の今までに打ち立ててきた学問上の業績は、彼が今その功績をたたえているブッコした数々の科学者たちのそれに比べて優るとも劣らないのである。こういうポアンカレにとつて、亡くなった人たちの業績を褒めたたえることは困難な仕事でない。それを学問上のポレミクに従うのに比べるなら、甚しく少なく自分を食いちぎる仕事である。学問上のポレミクが、論敵の攻撃よりも自分自身の攻撃に懸っているのに反し、論敵の手で見事に暴露された自分自身の無力をどこまで逆に切り捌いて行くかに懸っているのに反し、甚しく余裕のある仕事である。ポレミクにあるものは素樸であり、賞讃にあるものは優雅である。僕はポアンカレのこの本を読んで人を褒めるといふことは何とむずかしいことかと

感じ、俺は人をポアンカレールのように褒めることをしまいと考えた。

もちろん僕はポアンカレールのように褒めることを問題にしているのであって一般に褒めることを問題にしているのではない。^(注4) スウェルドロフが死んだ時に書いた^(注5) ソスノウスキーの文章などはポアンカレールの哀悼の言葉とは性質が違う。ソスノウスキーの場合それは文字通りに哀悼の言葉であり、その持っている嘆きの調子が人を打つほどに素樸に現われている。それは仲間の死を悲しんでいるのであって死んだ彼にどの椅子を許そうかと考えているのではない。こういうせっぱつまった状態は中身がつまっている。中身のつまっていないせっぱつまった状態なんてものはどこにもない。そして中身がつまっているということ、せっぱつまっているということは、その仕事に当人が身を打ち込んでいること、全身で歩いていることにほかならない。僕の考えている素樸というのはそういう態度を指している。

そこでそこからして僕は若干キテレッツな次ぎのような考えを持つている。それは⁽⁴⁾ 芸術家とか詩人とかいうものは、彼が芸術家とか詩人とかいうものからどこまで自分を切り裂いて行くかということにその価値が懸つてくる、ということなのだ。制作をどこまで叩き上げるかということは、生活をどこまで叩き上げるかということを基礎にしない限りいくらやってみても墮落だと思ふのだ。作家が生活を叩き上げるといふことは制作を叩き上げることによつてしかなされないといふことが真理であるにもかかわらずだ。

^(注6) ツルゲーネフと^(注7) ドストエフスキーとを比べてみると、僕はドストエフスキーの方が生活を叩き上げることを知つていたと思う。僕の考えによればツルゲーネフは到底ドストエフスキーに及び難い。ドストエフスキーは自分の肉体で物語をこさえた。ツルゲーネフは小説をこさえるために生活した。ドストエフスキーの作にはどこにもドストエフスキーの血が^(注8) 滲えられている。ツルゲーネフの何かは滲えられていようが血は滲えられていない。ツルゲーネフならどこからひっくり返して読んでもいいのが、ドストエフスキーではそう行かない。ドストエフスキーはほかのものに手を出さなかつたがツルゲーネフはあれやこれやと手を出した。ツルゲーネフには芸術だけが問題であつて、芸術というものがそれあつての^(注9) 物種であるところの^(注10) 肝腎の人間生活はあ

まり問題でなかった。だから彼は彼の以前の制作から脱却して次ぎの制作へ行つた。しかし以前の制作を生んだ彼の以前の生活から手を切ることをしなかった。だから彼の制作は次々と現われても、それを裏づける彼の生活が発展したということにならない。ガラス窓のガラスの色を次ぎから次ぎへと取り換えたに過ぎない。そいつは溜り水だ。そいつの打ち方は臭い。じきにたまらなくなる。で、そうなれば、作家がいくら大作を次々に書いたところでその作家の価値が高まったとはいえなからうと思うのだ。そういうのではつまり、作家が制作に身を打ち込むということが本当に実現されないと思うのだ。制作に生活を引かずられるのでなしに、生活を発展させるためにどこまで制作を削り落すかが大切だと考えるのだ。

そこからして僕はまた、いい作家というものは新しい一つの仕事にそれまでのすべての仕事を打ち込むものだと考えている。最後の作の中へはその一つ手前までのいっさいをぶち込む。すべての経験、すべてのすでに取り扱われた対象、既に取り扱われた取扱ひ方、すべての大根おおねから小手先までの技術、そういうものいっさいをぶち込む。僕の考えによれば、このすべての瞬間にいっさいを叩き込むという態度こそ最も素樸な態度なのだ。

人がこういう状態にいる時は誰もわき見したりつまらぬ気がねをしたりはしないだろう。その瞬間にやった自分の行為に対して註釈したり弁解したりしないだろう。そんなことはできないし、そんなことは吝けち臭く思われるだろう。で、僕は、作家なら作家は、彼の人的価値を問うためには彼の制作上の価値だけを取り出して見せる覚悟を持つ必要があると考える。後世の全集編纂者へんさんや本屋の類が断簡零墨だんかんれいぼくを蒐集(注8)するのはいいことだろうが、万一作家がそのことを全集編纂者や本屋の手代に期待して死ぬとあれば、彼は墮獄するしかあるまいと思うのだ。ここで僕は仕事というものについての僕の考えを書きつけることにする。おそらくそれもこの素樸ということに関係してくるだろうから。

僕のひとり考えでは、仕事の価値はそれがどこまでそれを取り囲む人間生活の中に生き返るかにある。車輪の発明者を誰も記憶していない。だが車輪を使わない人間が一人もいないくらいに彼を記憶している。誰も車輪の発明者に感謝していない。しかし人間の残らずが車輪を使用しているということよりも立派な感謝状は一枚もな

いに違いない。我々はしばしば、歴史一般の中に掻き消されている力学の歴史、医学の歴史等々を忘れている。同様に芸術の歴史の中にしばしば掻き消されている芸術に関する学問の歴史を忘れている。また例えは演劇の歴史にしても、その中に燃り込められて素人には見えない演出の歴史、建築の歴史、照明の歴史等々を忘れている。忘れていどころか僕なぞはだいたい少しも知らない。そしてその無知からして、我々自身の文字となつて残るような仕事だけが仕事だと思ひ込み、それがそれとして人の眼に映るために千万無量のお蔭を蒙っている眼に見えない仕事、瞬間に消えてゆくような仕事を仕事だとも思わないようになる。それは間違つており、無知であるために不遜であるところのものであり、仕事の価値を眞実に知っており、それゆえこういう輩からは永久にカエリみられないような仕事を一生の仕事としてコツコツと築いてゆくような賢い人たちからは憐まれるところのものである。こういう本当の賢さを持った人たちから笑われ憐まれることのないような考え方こそ、僕は、我々の持つべき仕事に対する素樸な考え方だと考えている。

(中野重治「素樸ということ」による)

- (注)
- 1 フェーブル——フランスの昆虫学者(一八三三—一九一五)。
 - 2 ボアンカレー——フランスの数学者・物理学者(一八五四—一九二二)。
 - 3 ポレーミク——ドイツ語で「論争」、「論戦」のこと。
 - 4 スウェルドロフ——ロシアの革命家・政治家(一八八五—一九一九)。
 - 5 ソスノウスキー——ロシアの革命家、ソ連の政治活動家、ジャーナリスト、政治評論家(一八八六—一九三七)。
 - 6 ツルゲーネフ——ロシアの小説家(一八一八—一八八三)。
 - 7 ドストエフスキー——ロシアの小説家(一八二一—一八八二)。
 - 8 断簡零墨——されぎれになった書きものや文書の断片。

問

(A) 線部(イ)の漢字に改めよ。(ただし、楷書^{がしよ}で記すこと)

(B) 線部(a)と(c)の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(C) 線部(1)について。なぜ「素樸」はそれについて語ることができないのか。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 素樸とは、愚直に真理を追求する態度であり、それがどのような結果になろうと関係ないから。

2 素樸とは、寡黙さのなかに蓄えられた熱意であり、言葉で語らないこと自体に意味があるから。

3 素樸とは、周囲の誤解を恐れず、他人からみれば馬鹿々々しく思える仕事に没頭することだから。

4 素樸とは、目の前の仕事に全身全霊で打ち込み、脇目もふらずに瞬間を駆け抜けることだから。

5 素樸とは、自分をせっぱつまった状態に追い込む力であり、当人にもその状態を説明できないから。

(D) 線部(2)について。「僕」はなぜ、『科学者と詩人』を読んだときポアンカレーがちっともおもしろくないと感じたのか。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 すでに学問上の権威と化したポアンカレーが、自分の論敵を褒めたたえることで、逆に自らの地位を高めようとしているように感じられたから。

2 生前は学問上のライバルであったはずの科学者が亡くなったとたんに、態度を豹変させて褒めそやすポアンカレーのしたたかさが透けてみえたから。

3 亡くなった人に対して、どのような言葉で哀悼の意を表すれば周囲が納得するかを知悉^{ちしつ}しているポアンカレーの態度が傲慢に感じられたから。

4 亡くなった人間の存在性よりも、残された自分がどれほど大きな損失を感じているかを強調するポアンカレーの計算高さが鼻についたから。

5 自分は少しも心を乱すことなく、亡くなった論敵を上手に褒めたたえるポアンカレーのものが、緊張

感に欠けているように思えたから。

(E) —— 線部(3)について。「甚しく少なく自分を食いちぎる仕事」とあるが、筆者はそれをどのようなものに喩たとえているか。本文中の表現を抜き出して記せ。

(F) —— 線部(4)について。「芸術家とか詩人とかいうものは、彼が芸術家とか詩人とかいうものからどこまで自分を切り裂いて行くかというところにその価値が懸つてくる」とはどういうことか。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 芸術家や詩人にとって、制作することと生活することは同一であり、自分という存在を食いちぎり続ける
不測の営みだけが価値をもつということ。

2 芸術家や詩人は、生活を発展させるためにどこまで制作を削り落とすことができるかを考え、より厳選された作品だけを遺そうとすることが大切だということ。

3 芸術家や詩人にとって重要なのは、生活を叩き上げることであり、次々と新しい制作に打ち込んでいくこともまた、生活を発展させるための方策だということ。

4 芸術家や詩人は、自分が過去に制作したものはもちろん、生活のなかに安住しようとする気持ちすら棄て去り、常に新しい価値を追求しなければならないということ。

5 芸術家や詩人が後世に伝えることができるのは、制作上の価値だけであり、彼自身がどのような人間で、どのような生活を送ったかを問う必要はないということ。

(G) —— 線部(5)について。「本当の賢さを持った人たちから笑われ憐まれることのないような考え方」とはどのような考え方か。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 一生にわたって、長い時間をかけてコツコツと築きあげた仕事こそ意味のある仕事であり、その評価は後世に委ねればよいとする考え方。

2 仕事の価値は、それがどれだけ人間生活の営みに還元されたかによって問われるものであり、自分の名前

が残るかどうかは問題にしないような考え方。

3 歴史のなかで掻き消されてしまった名もない人々の尽力に感謝し、眼に見えない仕事を誠実にこなせる人間こそ賢人であるとする考え方。

4 文字となつて残るような仕事だけが仕事だと思い込んでいた自分の無知と不遜に気づき、それを改めることによつて、仕事の真価に近づこうとする考え方。

5 よりよい仕事をするのが人間的価値を高めることにつながるという信念をもつて自分の仕事に邁進し、周囲の評価に頓着しない考え方。

(H) 左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ ファーブル『昆虫記』の魅力は肉体の思考を実験や観察で裏付けているところにある。

ロ 作家は、自分の作品について後から注解を加えるようなことをしてはならない。

ハ 人間には、自分の仕事に誠実に取り組み、それを社会に役立てていく責任がある。

ニ 自分がそれほど大切だと思っていないことで他人から誤解されるのは煩わしい。

ホ ツルゲーネフにとつて、作品を書くことと自分がどう生きるかは別問題だった。

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。ただし、設問の関係で返り点、送り仮名を省いたところがある。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

玉^(注1)仁愛不⁽¹⁾矜^(注2)雖^(注3)貧賤^(注4)廝^(注5)養^(注6)必^(注7)尽^(注8)其^(注9)心^(注10)力^(注11)而^(注12)
 医^(注13)療^(注14)貴^(注15)人^(注16)時^(注17)或^(注18)不^(注19)愈^(注20)帝^(注21)乃^(注22)令^(注23)貴^(注24)人^(注25)羸^(注26)服^(注27)變^(注28)
 処^(注29)一^(注30)針^(注31)即^(注32)差^(注33)。召^(注34)玉^(注35)詰^(注36)問^(注37)其^(注38)狀^(注39)。對^(注40)曰^(注41)「医^(注42)
 之^(注43)為^(注44)言^(注45)意^(注46)也。腠^(注47)理^(注48)至^(注49)微^(注50)隨^(注51)氣^(注52)用^(注53)巧^(注54)針^(注55)石^(注56)之^(注57)
 間^(注58)毫^(注59)芒^(注60)即^(注61)乖^(注62)神^(注63)存^(注64)於^(注65)心^(注66)手^(注67)之^(注68)際^(注69)可^(注70)得^(注71)解^(注72)而^(注73)
 不^(注74)可^(注75)得^(注76)言^(注77)也。夫^(注78)貴^(注79)者^(注80)處^(注81)尊^(注82)高^(注83)以^(注84)臨^(注85)臣^(注86)臣^(注87)懷^(注88)二^(注89)怖^(注90)
 懼^(注91)以^(注92)承^(注93)之^(注94)其^(注95)為^(注96)療^(注97)也^(注98)有^(注99)二^(注100)四^(注101)難^(注102)焉^(注103)自^(注104)用^(注105)意^(注106)而^(注107)
 不^(注108)任^(注109)臣^(注110)一^(注111)難^(注112)也。將^(注113)身^(注114)不^(注115)謹^(注116)二^(注117)難^(注118)也。骨^(注119)節^(注120)
 不^(注121)彊^(注122)不^(注123)能^(注124)使^(注125)藥^(注126)三^(注127)難^(注128)也。好^(注129)逸^(注130)惡^(注131)勞^(注132)四^(注133)難^(注134)
 也。針^(注135)有^(注136)二^(注137)分^(注138)寸^(注139)時^(注140)有^(注141)二^(注142)破^(注143)漏^(注144)重^(注145)以^(注146)二^(注147)恐^(注148)懼^(注149)之^(注150)心^(注151)
 □以^(注152)裁^(注153)慎^(注154)之^(注155)志^(注156)臣^(注157)意^(注158)且^(注159)猶^(注160)不^(注161)尽^(注162)何^(注163)有^(注164)於^(注165)病^(注166)
 哉^(注167)此^(注168)其^(注169)所^(注170)為^(注171)不^(注172)愈^(注173)也^(注174)」帝^(注175)善^(注176)其^(注177)對^(注178)。

〔後漢書〕による

(注)

- 1 玉——郭玉。中国古代の医者。
- 2 廝養——雜役を行う召使い。
- 3 帝——和帝。後漢の天子。八八—一〇五年在位。
- 4 羸服——粗末な服。
- 5 医之為言意也——「医」の語義は「意」である。
- 6 腠理——皮膚のすき間。
- 7 氣——身体を流れる生命力の根源。
- 8 針石之間、毫芒即乖——針を打つ場所にわずかな違いがあっても失敗する。「針石」は針治療の道具。
- 9 臣——自己をへりくだってということば。わたし。
- 10 怖懼——恐れること。
- 11 針有分寸——針を打つには深淺がある。
- 12 時有破漏——日には凶の日がある。
- 13 裁慎——慎重であること。

問

(A) 線部(1)の意味として最も適當なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 であれば 2 であっても 3 だけではなく

4 よりはむしろ 5 でありながら

(B) 線部(2)の内容として最も適當なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 郭玉が帝の命令によつて心力の尽くし方を変えて治療したこと。

2 郭玉は、貧しい人には心力を尽くして治療を施しても、貴人には心力を尽くして治療をしない場合があったこと。

3 郭玉が貴人を治せなかつたとき、帝が貴人に粗末な服を着せ住み家を変えさせると、すぐに治せたこと。

4 貴人であっても、粗末な服を着、質素な生活をしていなければ、郭玉は治療を施さなかつたこと。

5 郭玉が貴人を治療するとき、どうしても心力を尽くすことができず、時に治らない場合があつたこと。

(C) 線部(3)について、左記各項のうち、その内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 逸樂にふけることを好み、身体を動かすことを嫌う。

ロ 骨や関節が弱いため、薬を使うことができない。

ハ 医者に対してつつしみ深い態度をとらない。

ニ 自分の意志を通して医者に任せない。

(D) 空欄 にはどのような言葉を補つたらよいか。左記各項の中から最も適當なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 軽 2 長 3 最 4 強 5 加

(E) 線部(4)の訓詁として最も適當なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 しんのいすらかつなほつくさず、なんぞやまひにおいてすることあらんや。
 - 2 しんのいまさになほつくさざらんとす、なんぞやまひにおいてすることあらんや。
 - 3 しんのいしばらくなほつくさざるがごとし、いづくにおいてすることにやまひあらんや。
 - 4 しんのいまさになほつくさざらんとす、いづくにおいてすることにやまひあらんや。
 - 5 しんのいすらかつなほつくさず、いづくにおいてすることにやまひあらんや。
- (F) 線部(5)の理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。
- 1 針を打つにはわずかな過ちも許されないが、時に郭玉はほんの少し手元が狂うことがあったから。
 - 2 郭玉は、貴人に針を打つとき脅え恐れ、心力を尽くすことができなかつたから。
 - 3 当時、貴人の病は難病が多く、治療が困難だつたから。
 - 4 心力を尽くせなくても技巧が備わつていれば治療はできることに気づかなかつたから。
 - 5 郭玉は、貴人に対して尊大な態度で臨んでいたから。

三 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

敦敏(あつしん)の少将(すしょう)の子なり、佐理(すけだいら)大式(おほしき)、世の手書(よのてがみ)の上手。任(まか)はてて上(のほ)られけるに、伊予国(いよ)の前(まへ)なる泊(と)まりにて、日(ひ)いみじう荒れ、海(うみ)の面(おもて)あしくて、風(かぜ)おそろしく吹きなどするを、少しなほりて出(い)でむとしたまへば、また同じやうになりぬ。かくのみしつづ日(ひ)ごろ過(あ)ぐれば、いとあやく思(おも)ひして、もの問(と)ひたまへば、「神(かみ)の御(み)崇(たか)り」とのみ言(い)ふに、さるべきこと(こと)もなし。いかなること(こと)にかと、怖(おそ)れたたまひける夢(ゆめ)に見(み)えたたまひけるやう、いみじうけだかきさましたる男(おとこ)のおはして、「この日の荒(あ)れて、日(ひ)ごろここに経(た)たまふは、おのれがしはべることなり。よろづの社(やしろ)に額(かぶた)のかかりたるに、おのれがもとにしもなきがあしければ、かけむと思(おも)ふに、なべての手(て)して書(か)かせむがわるくはべれば、われに書(か)かせたてまつらむと思(おも)ふにより、この折(ま)ならではいつかはとて、とどめたてまつりたるなり」⁽¹⁾とのたまふに、「誰(たれ)とか申(まう)す」と問(と)ひ申(まう)したまへば、「この浦(うら)の三島(さんしま)にはべる翁(おきな)なり」⁽²⁾とのたまふに、夢(ゆめ)のうちにもいみじうかしこまり申(まう)すと思(おも)ふに、おどろきたまひて、またさらにも言(い)はず。⁽³⁾さて、伊予(いよ)へ渡(わた)りたまふに、多くの日(ひ)荒(あ)れる日(ひ)ともなく、うらうらとなりて、そなたさまに追(お)風(かぜ)吹(か)きて、飛(と)ぶがごとくまうで着(き)きたまひぬ。湯(ゆ)たびたび浴(あ)み、いみじう潔(けつ)斎(さい)して清(きよ)まはりて、昼(ひる)の装束(まつぷく)して、やがて神(かみ)の御(み)前にて書(か)きたまふ。神(かみ)司(つかさど)ども召(よ)し出(い)だして打(う)たせなど、よく法(はふ)のごとくして帰(かへ)りたまふに、つゆ怖(おそ)るることなく、すゑずゑの船(ふね)にいたるまで、たひらかに上(のぼ)りたまひにき。わがすることを人間(にんげん)にほめあがむるだに興(きよう)あることにてこそあれ、まして神(かみ)の御(み)心(こころ)にさまでほしく思(おも)ひしけむこそ、いかに御(み)心(こころ)おごりしたまひけむ。⁽⁴⁾

(「大鏡」による)

(注) 1 佐理——藤原佐理。敦敏の長男で、正暦二(九九二)年に大宰大式となる。

2 三島——瀬戸内海の大三島のこと。大山祇神社がある。

3 昼の装束して——正装である束帯姿になつて。

4 打たせ——額を社殿に掲げるために、打ち付けること。

問

(A)——線部(1)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 意外だ 2 おそろしい 3 心配だ 4 不思議だ 5 不都合だ

(B)——線部(2)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 神が祟ったというような兆候もない。 2 すぐには納得することができない。

- 3 祟りを受けるような心当たりもない。 4 天候が回復するようなこともない。

- 5 なかなか出発することもできない。

(C)——線部(3)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 かなり 2 さまざま 3 上手 4 すべて 5 普通

(D)——線部(4)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 あなたに書かせ申しあげよう。 2 私に書かせてください。

- 3 私のために書きいたたこう。 4 自らお書きくださるだろう。

- 5 自然とお書きなされるだろう。

(E)——線部(5)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 この季節であればいつがいいのだろうか。 2 この機会でなくてはいつがあるうか。

- 3 こんな場合でなくてもいつかはできるだろう。 4 こんな時節でなければいつでもよいのに。

- 5 こんな場合であつてもいつか実現できるだろう。

(F)——線部(6)の意味を五字以内で記せ。

(G) 線部(7)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 今さら夢の中の話を人に話すこともできない。
- 2 おそれ多くて相手に何も言えなかった。
- 3 謹んで書こうと決めたことは言うまでもない。
- 4 まったく言葉に言い表すことができない。
- 5 夢の中ではそれ以上のお告げがなかった。

(H) 線部(8)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 かるうじて
- 2 しだいに
- 3 しばらくして
- 4 すぐに
- 5 ゆっくりと

(I) 線部(9)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 現世においてもはやされることまで
- 2 世間でほめたたえるだけでも
- 3 せめて人並みにほめられたことだけでも
- 4 人間業でないと尊敬するだけでも
- 5 面と向かって直接にほめることさえ

(J) 線部(10)の「御心おごり」の説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 勝手な振る舞いをする
- 2 神をも恐れないこと
- 3 邪念を持つこと
- 4 他人を見下すこと
- 5 得意になること

(K) 線部の文法上の意味は何か。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 自発
- 2 受身
- 3 可能
- 4 尊敬

(L) 線部(イ)～(ニ)はそれぞれ誰の誰に対する敬意か。左記各項の中から最も適当なもの一つずつ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号を二度以上用いてもよい。

- 1 書き手の藤原佐理に対する敬意
- 2 書き手の三島の翁に対する敬意
- 3 藤原佐理の三島の翁に対する敬意
- 4 三島の翁の藤原佐理に対する敬意